黄昏のオオカミ―The Twilight of Xenoatla―

pandi剛種

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黄昏のオオカミ―Ｔｈｅ　Ｔｗｉｌｉｇｈｔ　ｏｆ　Ｘｅｎｏａｔｌａ―

【Ｎコード】
Ｎ４６０１ＢＡ

【作者名】
ｐａｎｄｉ剛種

【あらすじ】
あらすじ：この世界は終わりを迎えようとしていた。『異人』化と呼ばれる現象は約九十億人いた人口を約一億人にまで減らし十年だった今でも神は『人』を人間と異人に選別した。俺は獣人、異人のなれの果て、或いは成りそこない、人の意思を持ち獣の体を持ち、仲間と共に『人』に争いを挑む者。

「ねぇユウ。君は何のために戦うの？」

わからない。この戦いの果てに何があるかはわからない。ただ、別に戦いに勝利するつもりはない、差別をなくしたいわけじゃない。あの日起きた夕暮れの地獄を終わらせるため、仲間をこの地獄から救うため、俺はこの道を歩いていく。※この作品は最終話投稿時点から七日目に削除します

一話目

戦い続けて既に十年が過ぎた。
いつ終わるともわからない小競り合いの連続。
仲間は疲弊の色こそ見せないものの、刻苦は時の流れと共に確実に空気に滑り込み、体をむしばんでいった。
時が過ぎれすぎるほどに、仲間は減っていく。
少しずつ死んでいく。
狙撃されるもの。
流れ弾に当たるもの。
失血死。
服毒死。
そして、自殺――――
仲間は少しずつ減っていった。
ソレと共に、道も遠のいていった。
誰かがやらなければならなかった。
道を開く者が必要だった。
この道を、たった一人で歩く人間が必要だった。
――――行こう。
この道の先に未来があると言うのなら、この先に行き戦いを終わらせることができるのなら。
一歩を踏み出せば、砂塵が舞い上がり夕焼けを霞ませる。
空はどんよりとしてやがて街が黄昏に沈む時に差しかかる。
そこは東京。
かつて俺達が平和に過ごした街、地下には迷路の如き線路と通路

が走り、地上には巨大なビルがいつくも立ち並ぶ。
今は、それらが全てカモフラージュ。
都庁ビルを中心に建物は巨大な遮蔽物になり、地下道は俺達の基地への道を繋ぎ、敵を遮る。
そこは東京。
巨大な戦場となった、廃墟。今は亡き世界の中心。
そして、俺達の故郷。
――行こう。
黄昏の夕闇に、広大な戦場が沈んでいく。
もうすぐあちこちでサーチライトが照らされて、街は夜の戦いへと色を変えていくだろう。
夕闇を縫い、俺達は再び地面を蹴り上げる。
銃は片手に、防弾スーツを身につけ、通信デバイスを口元に添え、灰の空気を吸い込み、巨大な棺桶に身を包む。
六メートル強のパワードスーツ、徹甲弾を装備したガトリングを担ぎ、脚部には対地中用パルスバスターを装備。肩には予備弾薬を担ぎ、モニターの向こうに宵に濡れた戦場を捉える。
皆、一斉に操作レバーを握りしめる――
東京が夜に沈んでいく。
暗闇に染まった夜闇を無数のスポットライトが照らし、至る所で暗闇がかき消される。
不意に、夜風に硝煙が混ざり、突き出た鼻につく。
程なく遠くで対装甲ライフルの射撃音が尖った耳に響き、小さく息を吸い込み、脚のレバーを踏みこむ。
『――――先発隊が敵とぶつかりました』
強化パワードスーツが動き、それだけで地面が揺れる。
戦いの始まりだ。
明日に繋がるかもしれない、それともこれで終わりかもしれない。
第二次強襲作戦。
朝が始まるまでに、決着を付けよう――――

「ガングレド、皆の命を預ける」
『はい、隊長』
「行こう――――送電施設を今日こそ落とす」
夜の闇の中、俺達は駆ける。
これで終わることを信じ、明日へ命を繋げられることを信じ、地面を踏みこみ、強く歩いていく。
そして、目指すは東京都庁。
巨大なビルの奥へ――――

黄昏のオオカミ　―The Twilight of Xenoatla―

二話目

十年前、この世界の片隅で異常な出来事が起きた。
ある日。突然、何の前触れも前兆も、科学的予見も起こる余地もなく。
人が、水風船のように膨らみ、そして弾けた。
街の真ん中で鮮血が人々に振りかかり、やがて騒動が東京の街の片隅で起きた。
ただそれは、一時的な猟奇的な殺人事件だと思われた。
だけど、半年後、同じことが起きた。
一つだけじゃない。
渋谷。
人が行きかう、街の真ん中で三十の人間が場所を違えて一斉に破裂すると言う事が起きた。
同じく騒動になった。
ただこれはここで終わらなかった。
その後、別の人間が、人の姿をやめ、異形の化け物へと姿を変えた。
それが、最初の『異人』だった。
写真で見ただけだが、壮絶なものだ――もげた首の断面から無数の触手がイソギンチャクのように伸び、肩からは動物の頭が迫り出していた。股の間からは大量の毛がワサワサと生えて、イカのようだった。
背中には翼が生え、胸からは同じ動物の顔が出ていた。
まさに――――化け物だった。
その人間はすぐさまに捕らえられ、解剖され――――程なくして、

解剖をする余裕がなくなった。
当然だ、全世界で同じようなことが起きたのだから。
街中で同じように、化け物へと変化する人間が増えてきて、普通の人間を殺していく事が起きた。
街が血の海に沈んだ。
そんな事が、世界中で起きた。
子ども、老人、男女関係なく、無差別に、平等に全ての人間がそうなる可能性を、神は与えた。
そんな状況を誰も取り締まらなかった。
政府という器には、既に化け物どもが跋扈していたから。
ありえなかった。
そんなあり得ない事が科学的に何の前兆もなく起きるわけがない。
だけど、何一つ手掛かりが見つかることなく、その変異現象は世界でワクチンの無いインフルエンザの様に増えていった。
結果、九十億人いた人類のうち、八十億人が『化け物』に、そして残りが人間とに振り分けられた
２０５６年、二月十四日。
夕日の眩しい、午後四時二十分。
神が与えたもう選別の時――その日、人は生きるべき命と、死すべき命に選別された。
皆、死んでいった。
残ったのは、普通の肌をした『人間』と獣のような頭と毛むくじゃらな肌をした、理性の残った『獣人』の二種類。
今は、その十億人のうち、残った二種類の人間が、互いに戦い、或いは狩りをしているだけだった。
獣と人が戦い、或いは異人と戦う日々。
文明はすでに退廃し、残ったのはいくつもの兵器と人だけ。
そして――――異人と魔法。
荒廃した世界が、この青空の下に広がっていた。
この世界は、もうすぐ終わろうとしていた。

だけどあの日の夕焼けは、未だに続いていた――――

三話目

２０６６年、十二月二日。
東京都心。
メグロ区画。
崩れ落ちた廃ビルがいくつも並び、かつて人が住んでいたであろう廃屋がひしめく居住区画。
人の気配はなく、街の明かり一つない夜の暗闇が周囲に広がる。
瓦礫が縦横に走る道に無数に走り、横倒しに崩れたビルが大きく高速道路を横倒しに倒していた。
路地裏には野良猫など動物は消え、いるのは無数の触手の生えた肉塊の骸。
『異人』の死体が暗闇の中、至る所に転がり、或いはビルの窓からダラリとだらしなく上体を垂らしていた。
五つの首を持ち、二つに裂けた胴をもった化け物。
七つの目があり、口腔の中に無数の顔を迫り出す、異形の生物が暗闇広がるメグロの街に転がっていた。
そんな死体をつつく鳥、蠅一匹すら現れず、腐ることすらなく暗闇に肉の塊が佇む。
ただ、四十万が夜闇に広がる――――
――――ドォオオンッ
ビルの合間から空へと立ち上る黒い土煙。
ズルリ……
衝撃に『異人』の死体が不意にビルの窓から零れおちる。
ビルとビルの間から迸る閃光。
闇を塗りつぶす光は絶え間なくフラッシュし、暗闇の中にドラムのような重たく激しい破裂音が走る。

ビルに反響する銃撃音――――白い硝煙がビルの合間から昇る。
ズゥウウンッ
地面に重たく響く衝撃音。
粉塵を大量に撒き散らし、崩れかけた廃ビルが中から折れて崩れる中、暗闇に飛び上がる大きな影があった。
六メートル超の巨体。
スラリとした四肢。
装甲は闇に溶け込むように、黒を基調にし、頭部は対照的に白く光を放つアイサイトが二つ、そして補助サイトアイが胸に一つ。
脚部には補助ロケットスラスターが装甲の内側から展開。
噴射口の光は脚部から零れるままに、無骨で滑らかな黒の装甲を照らす。
四機の両腕にそれぞれ、狙撃銃が計二丁、突撃小銃一丁、大型ガトリングキャノンを装備し、背部の弾薬パックを装備。
閃光を放つビルの合間から飛び退くままに、近くのビルに飛び退くままに、硝煙の幕の向こうに四機の巨人が装備を構える。
『……今だ、撃て！』
――――重たい発射音。
地面にアンカーを突き刺し固定した脚部がトリガーを引くままに、大きく後ずさりコンクリートが抉れる。
マズルブレーキから煙が立ち上り、閃光と共に対強化装甲用徹甲弾が二発同時に飛び出し硝煙の幕を晴らす。
そして眼下から噴き上がる閃光と弾丸の雨をかいくぐり、敵の影を捉える――
――――ドォオオンッ
重たい衝撃音と共に、同じような大きさの機体の胸元を貫いては、僅かに浮いた上体が下半身から千切れた。
空中をクルクルと回転して夜天に向かって弧を描く上体。
ソレと共にビルの上から降り注ぐように、対装甲ガトリングランチャーの雨がビルの間にいた七機の弾幕を押し返す。

大きく上下する八連バレル。
ガトリングガンを担いで弾幕を張り続け、残った二機は後ずさる敵機を捉えて正確に胸元を撃ち抜く。
暗闇を裂く断続的な閃光の中、敵の数が五機、四機と減っていく――
『アトリア！そろそろ引くぞ！』
『後十秒！』
『増援を引っ張って隊長の下に帰る気か！？』
――遠くから噴き上がる新たな光の雨。
刹那、ガトリングを背負っていた一機の頭部を掠める新たな弾幕に、四機は暗闇の中アイサイトを細めた。
そこには新たに五機、六メートル超の巨人が暗闇の中、無数の廃ビルの合間を縫い煙を引いてやってきた。
――日本連邦政府所属アーマードエグザス・エルザ。
大型ロボットとして八年前、アトモス社との共同開発により旧日本政府により作られた第二期エグザスを戦闘用に改良、人が乗れるように生産された機械。
分類は大型パワードスーツで操縦者の動きに忠実に追随する事で柔軟な動きと分厚い装甲による防御力を可能とし、小型核反応エンジンによる動力によりより重たいものが持てる代物だ。
エルザはそのエグザスの強化型であり、この日本を統治する連邦政府が所有する最新鋭現行機。
そんな最新鋭機が、目の前まで来ている――
『――渋いな……逃げるに逃げれん』
『狙い撃つ……！』
『敵の方が多い時はどうすると教えられた……！』
『……遮蔽物を利用する』
『あまり戦線は下げられんが――撤くぞ』
脚部固定用アンカーが外れ、装備した武装の重さに僅かに前のめりに浮く巨体。

夜闇の中、噴き上がる弾幕を背に、四機の巨人はソレゾれ足元のビルを離れ、再び細く入り組んだビルの合間へと飛び降りた。
バキリッと罅を走らせ割れるアスファルト。
巨体は僅かに地面に沈めば、脚部装甲から補助ブースターを迫り出し、足部裏面からキャタピラが迫り出した。
土煙を上げ、地面に沿って走行を始める四機。
その後ろから直ぐさま、アサルトライフルの強化弾が雨のように降り注ぎ、ジグザグに走る四機の装甲を掠める。
『グゥウウ……！』
『エトナ！弾薬バックパックを切り離せ！』
『これだけで何人敵が殺せると思ってるのよ！うち貧乏なのよ！』
『お前が死んでどうなるものかよ！』
『うっさい走れ！』
ドォンッ
逃走をしながら、周囲の狭いビルの壁に装甲を擦られ、ガトリングを持った一機が大勢を崩す。
膝を僅かに折り、脚部が地面を擦り走行スピードが落ち、巨体が地面に手をつく。
そして回転して滑りながら周囲の壁にぶつかり、黒い巨人が尻もちをつきながら、動きを止める。
損傷した頭部のアイサイトを動かしながら、閃光を上げ弾丸を巻きながら近づいてくるエルザが見える。
グッとガトリングの砲台を持ち上げては敵を狙う。
トリガーを引き絞る――
『撃ち方やめ――――』
――聞こえてくる低い声。
ヒュォオオオッ
闇を切る鋭い音。
瞬間、尻もちをついた黒い巨人の頭上、夜の空をよぎり、巨大な影が後方から飛び出してきた。

噴き上がる背部と脚部の補助推進スラスター。
スポットライトに照らされる黒い装甲。
滑らかな躯体は、柔軟な動きを空中に見せながらビルの合間から飛び上がり、眼下に五機のエルザを捉える。
腕の装甲から迫り出す長いナイフ。
スラスターを切り自由落下するままに、左腕内蔵ブレードが一機のエルザへと向けられる。
真っ赤にぎらつく二つのアイサイトが見下ろすままに暗闇にぎらつく――
――――ビルの間から立ち上る土煙。
路地内をくまなく広がる土煙の中、エルザの胸部装甲に縦に走り、火花を散らしながら機体が仰け反る。
そして暗闇と砂塵に視界が遮られ、関節が空回りながら、後ずさる――
『――――引いてもらおうか』
ヒュンッ
夜風を切る鋭い音。
砂塵を払い、周囲の建物の壁に真一文字に斬痕を浮かべ、暗闇からヌゥと姿を現す、長い銀髪。
追随するように噴き上がる衝撃波に晴れる土煙。
衝撃波に吹き飛ぶビルを横目に、前のめりに身体を屈め、斬痕に沿って崩れ落ちるエルザの前に黒い装甲の巨人が立っていた。
真っ赤な目が、黒い血飛沫を上げながら崩れる敵機の下半身の向こうに、四機の気配を捉える。
カシャリと小さな音を立てて走行の中に内蔵ブレードが収まる――
『エトナ。少し下がれ――ガングレド、戦線を構築するぞ』
ドスンッとアスファルトにめり込む脚部。
ソレと共に脚部の滑らかな黒い装甲が内側から開いていき、中から迫り出す巨大な杭が地面に突き刺さった。
キィイインッ

微振動を上げて甲高い音を震わせる八つのステーク。
四機のエルザが眼前で携行武器を構え、黒き巨人はグッと前のめりに身体を屈める。
紅い眼光を闇に浮かべる――
『広域パルスバスター始動』
――半径二キロの高周波攻撃。
『行くぞ、ガングレド』
立ち上る膨大な土煙。
甲高い空気の悲鳴と共に旧居住区画一体を覆う程に、地面が激しく割れ、砂塵が地面奥深くから噴き上がった。
音を立てて崩れ落ちる一体の無数の建物。
地面がクレーター状に窪んでいき、七機のエルザがよろめきながら、崩れた地面の中へと引きずられていく。
メグロ一体を覆うスポットライトを遮る程に夜空へと粉塵が立ち上る――
『撃て！』
――粉塵を晴らす程の激しい銃撃。
混乱する七機のエルザを捉え、暗闇を裂く閃光と共に、激しい弾幕が津波のごとく押し寄せてきた。
対装甲ライフル弾の群れが一直線に走り、夜の闇をよぎり、遥か後方から放物線描いて溜弾が土煙に吸い込まれる。
爆風がさらなる粉塵を形作り、後ずさる七機のエルザの四肢が降り注ぐ弾丸にバラバラになっていく。
ドスンッ
降り注ぐ溜弾が一機の胸部コックピットに直撃。
より激しい爆炎が浅いクレーター状の更地に噴き上がる中、紅い瞳をした黒き巨人は火柱に戦線を後退する。
肩には友軍機。ガトリングを引きずり、よろよろ歩く仲間を紅い瞳に捉える。
『エトナ……無茶をする』

『隊長……すいません』
『銃は人を殺すためにあるんじゃない』
『銃は、相手の動きを封じるために使う――生きているにせよ、死んでいるにせよ、相手に撃つことに意味がある……』
『危なくなったら直ぐに武器を捨てろ。……よく生きた、エトナ』
『隊長……』
『――ガングレド、エトナ機を回収、そっちに戻る』
やがて浅いクレーター状の戦場を離れ、二機のパワードスーツは再びビルとビルの合間の暗闇に戻る。
そこには先ほどの静寂はなく、いくつもの人影が動きまわっていた。
ビルの隙間、或いは廃ビルの屋上に立ちライフル、ヘビィマシンガンを取りまわす同型機が約二十機。
仲間が膨大な弾幕を作っていく中、その後方には巨大なトラックが何台も止まり、暗闇に動きまわっていた。
それは黒い巨人を収める程に大きなコンテナを牽引していて、紅い瞳の巨人はコンテナへと友軍機を引っ張っていく。
『――ユウ隊長。更に増援が十機』
『作戦は変わらん、戦線を上げる――流れ弾に当たるなよガングレド。皆にも伝えろ』
『了解』
ガシャンと重たい音立てて肩装甲に壁の固定用ハンガー。
巨大なコンテナに収納され、黒い巨人はその場で蹲るままに、力なく項垂れ、紅い瞳の巨人は同じく片膝をつき項垂れる。
シュゥウウウ……
装甲隙間から噴き上がる圧縮空気の解放により、舞い上がる長い銀色の髪。
そして首元の装甲が内側から開き、首の後ろから顔を出す人影が一つ。
「エトナ、大丈夫か」

コンテナ内のライトに照らされる銀色の体毛。
鋭く細める紅い双眸。
鼻腔は獣の如く突き出し、牙を大きな口の端に覗かせながら、そこには狼の頭を持った男が巨人の肩に立っていた。
口元には通信用マイク。
天井を指す尖った耳がヒクヒクと動き、熱っぽいため息が白んで口の端から零れる。
銀色の尻尾は黒いスーツから飛び出し風に舞い、巨躯が飛び降りるままに、目の前の友軍機へと足を運ぶ。
長い足の爪が歩きながらコツコツと床を叩き、ユウと呼ばれた狼男は同じく首の折れた巨人の下へと歩いていく。
「エトナ、返事をしろ」
「待って……ください。ちょっと、ハッチが歪んで――」
バキリッ
首元の装甲が剥がれ落ち、飛び出す人影が一つ。
そこには同じく顔が少し茶色い体毛に覆われ、尖った耳が黒髪から飛び出す『人間』がパワードスーツから飛び降りてきていた。
ドロドロになった白い肌。
キョトンとなる同じ紅い瞳。
『獣人』と呼ばれる人間は、互いに見渡し、ニィと笑みを浮かべるままに、グニャリと指で互いをつついた。
「よく生きた……」
「えへへっ――――隊長超格好いいっすよ」
「ありがとう、アリシアの報告だと、送電施設がこの向こうにあると聞いたが」
「はい、隊長の行ってた通り――――奴ら、ここから都庁まで電気を送っているようです」
「敵の数はどうだ？」
「一杯」
「数えてくれ……」

「えっと――――百ちょいのエルザが配備されていましたね。自走砲もいくつか配備されていました。
ただ送電施設自体に防衛機能はないように思えます」
そう言ってパイロットスーツの胸元から小型のＰＤＡを取り出しつつ、年端もいかない少女はそう告げる。
銀の狼男は表情は強張ったまま小さく頷くと、肩越しに彼女、エトナのＰＤＡを覗く。
「隊長、携帯の覗きこみはマナー違反です」
「固い事言うなよ――――施設自体にシールドエフェクトは？」
「アリシアがスナイパーでつついたけどなにもありませんでしたよ？」
「……。ぞろぞろ来るわけだ」
ペタンとげんなり気味に垂れる尖った耳。
肩を落とし苦い表情を浮かべる狼男横目に、少女、エトナは気まずそうに笑みを滲ませながら首をすぼめた。
「どのみち皆相手するわけだしいいかなって……」
「お前が死んだら俺は悲しい……今後は危険の無い方法で探るように」
「――――はいっ」
「少し休んでろ――――ガングレドッ」
照れくさそうに身体をよじるエトナを横目に、狼男は耳元に取り付けた通信用バイザーに手を掛けた。
そして尖った耳の向こうに、弾丸の発破音に混じって男の声が聞こえる。
『隊長。増援が更に十機――――更にフィールド外からこちらに十機。上空から攻撃ヘリが見えます
後エルザ輸送機がスポットライトの向こうに見えます』
「頃合いだな――――フィールドを迂回して送電施設を破壊する。そっちのチームには俺が入ろう」
『了解。我々は引き続き攻撃を続けます』

「戦線だけは崩すなよ。お前達だけが頼りだ」
『期待に応えて見せます、通信終了』
ブツリと音が途切れる。
狼男は強張った表情のまま小さく頷くと、やがてバイザーの周波数を変え、今度は別の人間に通信を掛けた。
「ゴルドチーム――――ミハイル、ベス、ピーター、ハルキ。聞いているか」
『はいはいっ。聞いてます隊長っ』
『時間ですか？』
『やっぱ撃ちっぱなしは楽しいけど少しダれるぜ……』
口々に話す仲間の言葉に、苦い表情を浮かべながら、狼男はため息を漏らしつつ、彼らに命令を届ける。
「よし揃ってるな、ゴルドチームは今から部隊を離れフィールドを迂回して送電施設を破壊してもらう」
『了解。すぐ切り上げます』
「こっちには俺も入る――――」
と、通信にノイズが入り、聞こえてくるのは甲高い少女の、嬉しそうな緊迫したような興奮した声だった。
『ユウッ、ダメだよっ』
「――――ミアか……」
ペタンと頭に張り付く尖った両耳。
少しうんざりしたような表情を通信機越しに見せながら、ため息を噛みしめ、銀の狼はマイクに息を吐きかけた。
「で、どうした……」
『同じように迂回してこっちに近づいている連中がいる。こっちのソナーに今一瞬だけ映ったよ』
「……ガングレドッ」
通信の周波数を合わせて、先ほどの男に話しかける――――
『攻撃を続けていますが、フィールド内で他に敵の姿は見えません。サーモも使っていますが』

「ありがとう。前進しろ。各機散開して敵の迎撃にあたれ。少しでも前線を上にあげていけ。ただし」
『無茶はするな――――了解ッ』
発砲音交じりの通信が途切れる。
「……地下の鉄道か」
『ステルスエフェクトを使用しているね。もたもたしているとこっちが挟撃に合うよ』
「ああ……」
狼男は表情は強張らせたまま、踵を返すと眼前にそびえる五メートル強の黒い鎧の巨人を見上げた。
――――東京獣人反乱軍所属機体、オルフェト。
エグザスを作り上げたアトモス・ホークライン社が独自に作り上げた強化骨格の規格であった。
エグザスとは違い、小型核反応エンジンは使用せず、特殊なエネルギーを使用した機体で、出力は低めなものの、その動きはより柔軟により人間らしい動きを可能にした、まさにスーツであった。
獣人の特質、その敏感な知覚にリンクさせ、索敵範囲を上昇させる能力があり、更に獣人の強靭な肉体を機体に反映させるために、搭乗者の能力によって機体の出力、及び装甲強度が大きく向上する機体だった。
エルザと違い、出力、性能と共に搭乗者の如何によってすべて決まる、そんな特殊な機体が配備されていた。その中心にはその特殊なエンジンが関係していた。
銀の狼男、ユウ・ハヤテが乗る機体は、その機体弾力性を更に特化させた機体であり、機体の能力よりもパイロットの身体能力が優先される機体だった。ただその装備はほぼすべて内蔵であり、内蔵機関砲、対装甲用ブレード、広範囲ステルス機能と特殊音波発生装置以外は装備されていない。
高機動を追求するために装備を内蔵した機体――そんなスラッとした躯体の巨人を前にユウは銀色の体毛を逆立てる。

興奮に僅かに鼻息を荒くしながら、スゥと目を細め巨人の装甲に手を触れる――
「――行こうか、相棒」
『ユウ、どうするの？』
「……ミア。ソナーで確認できた場所は？」
『ここから北東に一キロ先』
「ゴルドチームに連絡しておいてくれ……アルファチーム。アリシア、ミナト、ユン――――エトナは無しで」
後ろで愕然とした表情を浮かべる小さな女の子を横目に、狼男は通信バイザーを手に当て地面を蹴りあげた。
『隊長？うちのエトナがまたなんかやらかしました？』
「嫁を戦場に出すお前によりましだよミナト……別動隊がこっちに来ている、迎え撃つぞ」
『――――人出が少ないんですよ……うちらは』
「自分の手で守るように努力しても罰はあたらんよ――――ポイントをこっちで指定する、二分後に来い」
『了解ッ』
『あ、隊長。私の評価は――――』
「アリシア、後で説教だな」
『――――すんましぇん……』
通信が途切れ、銀の狼男はパワードスーツ、オルフェトの肩に飛び乗ると首の後ろに跳び移った。
そして、開いた首の装甲の中、ハッチの奥へ大きな体を滑り込ませる――
――暗闇に目の前に映る分厚い機械の棺桶。
立ったままの操縦。身体がすっぽりとはまるような感覚でコックピットに身体が収納される。
目元に自動でヘッドマウントディスプレイが取り付けられ、僅かに伸ばした手足が周囲の機械にすっぽりとはまる。
それは機体追随の為の操作デバイス、狭い空間の中に手足が壁に

収められる。
そして項垂れるままに、狼男はディスプレイの向こうに映る、ムスッとした獣人の少女を見下ろし笑みを浮かべる。
ガシャリ……
身体をよじるままに、黒き巨人、オルフェト・オルタカスタムを立ち上がらせる。
『――エトナは休んでおけ。俺が代わりに入る』
「ず、ずるい！」
『女は生きた方がいい』
「な、なんですかそれぇ！？」
『俺の単なるわがままだ――ミア、出るぞ』
紅い残光を引きながら踵を返すままに、音もなく地面を蹴りあげる巨躯。
ヒュォオオッ
突風を引きずりながら、高速で飛び出す黒い巨躯はまるで風の如く銀髪の後立を靡かせ再びメグロの廃墟へと姿を現した。
飛び出すままに振り返れば、そこには広がる浅いクレーター状の更地。
その中には崩れたビルの瓦礫を盾にして撃ち続ける味方オルフェトの姿、その奥で後ずさる敵機エルザの姿が見える。
前線は少しずつ上がっている。
その向こう、スポットライトに照らされ巨大な施設が見えた。
丸いドーム状の建物、周りには低い塀があり、その周りには巨大なパイプがまるでイカの足のように八方に伸びていた。
日本連邦政府所有の特殊電力送電施設。
ユウ達が壊すべき建物が、浅いクレーターフィールドの遥か向こうに見える――
（……ガングレド、頼むぞ）
戦い続ける仲間を横目に、風を切り翻す長い銀髪。
ドスンッ……ドスンッ

ビルの屋上に飛び上がるままに、ゆっくりと沈む廃ビル。
閃光を背に飛び上がる黒い巨人は、いくつものビルの屋上を伝い、宵闇の中を潜るように前かがみに駆けていく。
夜風を切りながら紅い目を暗闇に光らせ、弧を描いてビルから飛び降りる――
『ミア、このあたりか』
ズゥウウンッ
土煙を上げ、地面に降り立つ黒きオルフェト。
長い後ろ髪を靡かせながら、しなる膝を動かし立ち上がると、狼男は首を動かし周囲を見渡した。
『ここだよ、ランデブーポイントもここに設定したよ』
『ありがとう』
地響きが収まり、静まり返る夜の街。
廃虚の街を流れていく風。
土煙が晴れ、周囲のビルの窓から顔を覗かせた異人の骸がモニターに映る。
グシャリ……
地面に転がる無数の死体を踏みしめ、ゆっくりとユウのオルフェトはビルの壁に腕を這わせ路地を歩く。
だが敵の姿は見えなかった。
崩れかけたビルが斜めに折り重なりながら、眼前の視界を遮るのみ。
カラン……
傾いたビルの窓から剥がれたガラス片が装甲を撫でる。
地面を押し込む巨人の足音が静かにビルの間を反響し、冷たい風が黒い装甲を撫であげていく。
グルルルゥ……
緊張に喉を鳴らす――
『……そこか』
――ヒクリと尖る耳。

遠くから聞こえる、キャタピラが地面を擦る音。
鼻筋を掠めるは、金属の擦れる独特の匂い。
来る――――
『隊長、今つき――』
『――――アリシア、ユン下がれ！ミナト行くぞ！』
『了解！』
『出力調整――――パルスバスターッ』
後方のビルから飛び込んでくる中距離装備のオルフェトを背に、紅き瞳のオルフェトは地面に大きく足を踏み込んだ。
ザクリッ
脚部の装甲が展開し、四本のステークが微振動を上げてアスファルトに突き刺さる。
『――――始動』
足元から噴き上がる土煙。
ソレと共に、地面が大きく崩れ落ち、紅き瞳のオルフェトは地崩れに吸い込まれるようにに土煙の中へと潜った。
ソレと共に後ろからついてきていたアサルトライフル装備のオルフェトが土煙の中へと飛び込み、遅れて極長のバレルを備えた対装甲ライフルを担ぎ二機のオルフェトが続いていく。
そこは更に深い暗闇。
入り組んだ道はまるで蛇の如く、縦横無尽にメグロの地下を走り、立体状に入り組んだ暗闇は正に迷路だった
東京地下メトロエリア。
地下一キロに及ぶまでに広がった地下鉄道のうねりの表層へ紅き瞳のオルフェトは降り立つ。
――――暗闇に迸る激しい閃光。
刹那、天井から降り注ぐ土煙を貫き、いくつも弾丸が小さな雨をとなって、地下鉄道を走った。
クワッと見開く紅い瞳。
身じろぎひとつで弾丸をよけるままに、四機のオルフェトは背後

から飛んでくる硝煙の匂いに身体を屈める。
そして、細長く入り組む鉄道の向こう、暗闇の中で銃撃を行うエルザを捉える。
数は五機。
圧倒できる――――
『突っ込む――――ユン、アリシア。頼むぞ』
『了解、エンゲージ』
――――左腕から迫り出す鋭いブレード。
弾丸に目を細めながら、紅き瞳のオルフェトは脚部の補助スラスターに火を灯し、ゆっくりと身体を屈める。
飛び出さんと、黒い装甲を震わせる――
『ミナト、俺のケツを持て、行くぞッ』
『張りきって行きましょうか隊長！』
――――闇に走る紅い残光。
装甲の隙間から噴き上がる光の粒子。
屈む姿はまるで狩りをする夜の獣の如く――紅き瞳のオルフェトは光を放ちながら地面を蹴り飛び出した。
何百メートルとある距離は一秒の壁を越え、縮まる。
後ずさる暇すらなく、五機のエルザの目の前に、紅き瞳の巨人が、大きくブレードで虚空を薙ぎ払う姿が見える。
二機の機体の表面に一文字に斬った痕が浮かび、火花が宵闇に断続的に光を放つ。
『遅い……！』
後ずさる三機を追いかけ、紅い瞳のオルフェトの背中から飛んで来る弾丸。
片膝を折り、銃座を立てて放つ二発の徹甲弾は頭部を丸ごと粉々にして、衝撃に二機のエルザを吹き飛ばした。。
暗闇の中バウンドする二機のパワードスーツ。
闇に尾を引く紅い瞳。
その二機の胸部に喰らいつくように、飛び出した紅き瞳のオルフ

ェトは、突き出した内蔵ブレードを突き出した。
ガガガガッ
全重量を乗せ、火花を上げ装甲を抉る鋭い刃。
ビクンと僅かに喰らった躯体が痙攣すると共に、音無く内蔵ブレードを引き抜けば、黒と赤の混じった飛沫が中から噴き上がる。
黒ずんだ装甲が僅かに闇に光り、紅き瞳は血飛沫を浴び倒れたもう一体を捉える。
スゥと双眸を細め、巨躯を傾ける――
――――風を切る鋭い剣閃。
振り薙いだ刃は僅かに真空を生み、無音の衝撃波が周囲の景色を歪め、頭部の無いエルザに一本の筋が浮かぶ。
それは闇にくっきりと浮かぶ斬痕。
死線に沿うように胸部が縦に分かれていき、火花を散らし二つに分かれた断面が露わになる。
背を向け立つ紅い瞳の巨人の背後で、大きく爆発を起こす――
『残り……』
爆発を背に、立ちあがる巨躯。
爆風に銀色の後ろ髪を靡かせながら、紅い瞳のオルフェトはスゥと闇に眼を細め身体を屈める。
ダラリ左腕を垂らすままに火花を立て地面を擦るブレード。。
最後の一機が後ずさるままに、ライフル弾を飛ばそうと携行小銃をにじり寄るオルフェトに掲げる。
――――ドドドッ
闇に逆る断続的な閃光。
胸元を抉る三つの大きな弾痕。
巨大な空薬莢が足元に落ち、三点バーストに掲げたライフルの銃口から白煙が噴き上がる。
ゆっくりと小銃を構えたまま倒れるエルザを横目に、ミナトのオルフェトは肩にアサルトライフルを担ぐ。
そして、アイサイトの向こうに、身体を屈める黒き獣の鋭い眼光

を見下ろす――
『――良い腕だ』
『一匹残してくださいよ……』
『遅いお前が悪い』
『ひどい隊長。これが俺らのトップとか……』
『いやか？』
スゥと細める紅い双眸。
左腕に内蔵ブレードが装甲に収納され、屈めていた身体がゆっくりと起き上がり、紅い瞳のオルフェトは三機の友軍機を見つめる。
全機の生存を確認する――――
『うんにゃ。最高ですよ』
『ありがとう。……ミア、奴らのルートはどこからだ？』
シュゥウウウ……
装甲の隙間、或いは関節から零れる光の粒子。
長い銀髪の後立を翻し、紅い瞳の残光を引き、オルフェトは入り組んだ周囲を見渡し、線路を踏みしめる。
『――――ん。解析完了。そっちEルートから来ているよ。地図をこっちで出すから』
『いや。こっちから送電施設には入らん。ゴルドチームがやってくれるだろうし、こっちは挟撃が入らないように見張る。
他に挟撃の入りそうなところは？』
『――――いくつかありそうだけど、今のところどこも反応はないね』
『ポイントを提示してくれ。マンツーマンでオルフェトを向かわせる』
『本気でメグロを落とすの？』
『不利な戦いは今に始まったことじゃない』
地下鉄エリアから撤退を始める三機のオルフェト。
地面を蹴りあげ、紅い瞳のオルフェトは地面を蹴りあげ、地上から入ってきた天井の穴へと戻ろうとする。
長い後ろ立てを引き、その場を去ろうとする――――

――フワリ……
銀色の後ろ髪が、舞い上がり、肩装甲を撫でる。
『！』
反射的に迫り出す左腕内蔵ブレード。
立ち止まった紅い瞳のオルフェトはそのまま後ろを振り返るまま
に、グッと身体を屈め暗闇に向き合った。
『隊長？』
『風が来た……』
『どういう――』
『地下鉄に乗ったことぐらい、お前にもあるだろうユン』
そして入り組んだ線路の向こう、蛇の如く大地の食い破る迷路の
奥を覗く。
生温かい風に目を細める――
『来るぞ！』
――暗闇を再び破る激しい閃光。
ヒュオッ
風を切り、巨大な槍のような弾丸が、アリシアのオルフェトの腕
部を持っていた対装甲ライフルごと根こそぎ持っていった。
『キャアアッ！』
吹き飛び地面にバウンドして転がるアリシアのオルフェト。
ユンのオルフェトは後ずさるままに、闇の向こうから攻撃してく
る敵の気配に後ずさりつつ、狙撃銃を構えた。
だが矢次に降り注ぐ弾丸の中、照準はブれ、弾丸はあらぬ方向へ
と飛んでいく。
それでも、立ち上がるアリシア機をミナト機と共に庇いつつ、銃
口を迷路の暗闇に向けトリガーを引き絞る。
『た、隊長……！』
『アリシア、どうだ！』
『くぅ……腕……痛い、かも……』
『引くぞ！ステルスエフェクト起動する！』

――――噴き上がる光の粒。
右腕の内蔵機関砲を放ちながら、紅き瞳にオルフェトの黒い装甲が一斉に花びらを開くように開いた。
そして開いた装甲の隙間から光の粒が噴き上がり、闇をうっすらと照らすままに四機の機影を光の中に溶かしていく。
そして光の膜は膨れ上がるままに、四機の姿を完全に消し去り、やがて収縮する。
スゥと小さくなり、やがて粒子が消えてなくなる頃には、オルフェトの姿は闇の中に沈んで消えた。
それでも止まない、闇を照らすマズルフラッシュ。
銃撃は止まず、暗闇の中、四機のオルフェトがいた場所へと十機のエルザは弾幕を浴びせかける。
敵を殺す様に確実に、銃撃を浴びせかけていく――
『……ユウ……てめぇ……』
暗闇の中、呻くような声が闇に響いた。
『殺してやる……絶対にだ』
それは怨みに満ちた『人』の声だった。

四話目

「大丈夫か、アリシア……」
線路の奥へと退避しながら、紅き瞳のオルフェトから降り、銀色の狼は片腕のなくなった友軍機へと歩み寄った。
周囲の二機も同じく線路の隅に座り込み、壁にもたれかかったアリシアのオルフェトへと歩み寄る。
そしてヨロヨロと首元から這い出す人影を捉え、銀の狼男は地面を蹴り飛び上がる。
「隊長……すいません」
「よかった……」
――ホッと零れるため息。
そこには肩装甲に寄りかかるままに、あり得ない方向に曲がった右腕を垂らす獣人の少女がいた。
だがそれ以外に身体的外傷は胸元の折れたアバラ骨ぐらいでユウは満足げにうなずく。
「生きているだけでいい……ユン、ミナト、大丈夫だッ」
「よかったぁ……アリシア、ボケッとすんなよ頼むから！」
片腕の無いオルフェトの足元、黒い狼男のユンから飛び出す涙の罵倒に、アリシアはうっすらと笑みを零した。
と、スッと折れた腕に這う太い指。
痛みに体毛の滲んだ顔をしかめながら、目線を上げれば、そこには険しい表情を浮かべる銀の狼男の姿。
突き出た口腔を僅かに開き息を吸い、紅い瞳を細めて指を折れた部分に這わせる。
目を閉じて、囁く――

「エトリア――――アストライア……」
――手の平から噴き上がる光の粒。
刹那、囁く銀の狼男の手の平の中に円形の模様が浮かんでは空中に刻まれ、光の粒が零れた。
光の粒は、円形の模様から少女の腕を癒す様に纏っていく。
そして光の膜に腕全体が包まれるままに、ポカンと惚ける少女の腕の形が真っ直ぐになっていく。
ゆっくりと紅い瞳を開ける――
「……少しは楽になったか？」
「は、はい……今のは」
「仲間には内緒だ――――ユン、ミナト、アリシアを前線まで送れ」
手を閉じるままに、消えていく円形の模様。
ソレと共に光の粒もその姿を消し、ユウは肩装甲の上に立ち上がるままに、線路の向こうへと振り向いた。
フワリ……
噴きこんでくる生温かい風。
――――ガシャン……ガシャン……。
ヒクリと耳を尖らせながら、遠くから聞こえてくる重たい足音。
にじり寄る敵意に逆立つ首の体毛。
徐々にだが、敵の気配が近づいてくるのが突き出た鼻をつき、鼻筋に皺を浮かべながらユウは険しく目を細めた。
「……敵が来る。時間がない」
「隊長は？」
「増援を連れて前線には戻れん。ここで食い止める」
「はぁ！？」
惚けた声を上げるミナト、ユンは同じくぽかんと耳を垂らし口を開いたまま絶句していて、ユウは小さく肩をすぼめた。
「まったく――ならお前達が食い止めるか？」
「いや……でも……」
言い淀む二人。

蹲る彼女の身体を両腕に抱え上げると、黒い装甲を蹴りあげ銀の狼は二人の下へと降り立つ。
そして、二人にぐったりとなる獣人の少女を渡すと、銀の尻尾を翻し獣は再び片腕のないのオルフェトへと向かう。
スッと手の平を黒い装甲に添え、ゆっくりと目を閉じる――――
「……エトアス――――ファナトオルカ……」
「隊長？」
「……。俺一人でもどうにかなる、お前達は帰ったらゴルドチームの支援に回れ」
そう言いながら、ゆっくりと半壊したオルフェトから手を離すと、ユウは惚ける二人にそう告げた。
――――それは舞い散る蛍のよう。
音もなく弾ける粒子の花びら。
刹那、装甲の隙間から無数の光が舞い上がっては、周囲の暗闇を照らし、ゆっくりと銀の狼に降り注いだ。
グッと掲げて広げる手の平。
吸い込まれるように光の粒が、銀の狼の手の平へと集まっていく。
それはまるで渦を描くように――――
「マジでやる気だこの人……」
「無茶はお前らより下を行っているつもりだ。早く行け」
「……」
「ああ。俺のオルフェトを使え。お前達のオルフェトじゃ、アリシアの搬送はできんだろうし」
「――――しかも生身で戦うと言う……ガングレドさん失禁しますよ」
「友達が待っているからな……」
「はぁ？」
「――――なんでもない……」
小さくため息をつくままにユウは手の平を下ろす。
――――噴き上がる光の粒。
そこには小石程の大きさの白い結晶が獣の手の中に漂い浮かんで

いて、狼は静かに手の平を閉じ、胸ポケットに収めた。
そして踵を返すままに、惚けるユンとミナトを促し、アリシアを紅い瞳のオルフェトを搬送させる。
「ほら行け。ここは俺が食い止める」
「――十分経って帰って来なかったら……援軍にきますから」
「心配性だな……」
「アンタのせいでしょうがッ！」
怒号が古い地下鉄に迸り、ミナトはムッと顔を引きつらせながらアリシアをユウのオルフェトへと乗せた。
そしてユンとミナトもオルフェトに乗ると、やがて三機の巨人が銀色の狼を見下ろす。
少し心配そうに立つ三機の友軍を見上げ、銀の狼はペタンと耳を垂らし困った笑みを滲ませた。
「大丈夫、早めに帰るさ。銃も弾薬込みで結構持ってる」
『――――帰ったらガングレド副長にチクりますから』
「後で怒られるさ。……行ってくれ」
『あんたは俺達の希望なんだ。……死ぬなよ隊長っ』
「ここから百メートル行ったら地上に上がれ。敵はすべて本隊が対応しているが一応索敵は怠るなよ」
『了解、御武運を』
迫り出す脚部のキャタピラ。
土煙を上げ、騒音と共に二機のオルフェトはアリシアのオルフェトを肩に担ぎながら線路を走りだした。
噴きこんでくる風とは反対方向に、闇の奥へと沈んでいく――
――――別に、一緒に戦ってもよかった。
ペタンと零れる尖った耳。
スゥと闇の中、紅い瞳を細め困った笑みを滲ませるままに、銀の狼男は腰に手を当て踵を返した。
そして暗闇の中、僅かに俯きながら地面を蹴り歩き出す。
巨大な迷路の中、反響する自分の足音を聞きながら、静かに息を

吐き出し花をヒクつかせる。
獣の顔を強張らせ、闇の中にゆっくりと目を閉じる。
――ただ、これは俺の我がままだ。……最初から最後まで、全部。
ザワリ……
風の向こうに感じる敵意に逆立つ体毛。
鼻筋に自然と皺がより、牙を覗かせ獣人は体を僅かに奮わせ、腰から二丁の拳銃を引き抜いた。
大口径の自動式拳銃。
五発カートリッジの大型弾を装填し、獅子鼻のマズルブレーキを覗かせる巨大なバレルを持つ大型拳銃だった。
グッと握りしめれば、手に吸いつく感触。
それだけで安心感が胸を走り、狼はうっすらと口元に笑みを浮かべながら、獣顔を上げる。
暗闇の奥、入り組んだ蛇の如き道を伝い、やってくる十機の気配に尖った耳を震わせる。
向けられる激しい敵意に、脚を止めて二丁の銃口を向ける。
鋭く、ナイフのように鋭く目を細め、狼は闇に紅く残光を引く――
「……一週間ぶり、だな」
『……生きてたか……化け物が』
立ち尽くす銀色の獣人を前に、従軍を止める十機のエルザ。
ソレと共に十の銃口が狼男を捉え、その内の一体、白い装甲のパワードスーツがゆっくりと彼の下に歩み寄った。
吐き気がするほどにドロドロとした敵意。
剥きだす憎悪。
七年前から何も変わらず――
狼はニィと目を細め困ったような笑みを滲ませては、二丁の拳銃を構えたまま目の前の巨大な白い巨人に肩をすくめた。
そして、口を僅かに開いて、闇に囁く――
「……よぉ、タクト」

『ユウ……ユウ・アトラ……！』
「やろうか……」
『殺してやる……！』
――それ以上の会話はなく、ただ獣は紅い瞳を細める。
ガシャリッ
殺意と怨恨を露わに、白いエルザは持っていた巨大な突撃小銃を両腕にサッと構えてトリガーを引き絞る。
ソレと同時に銀の狼は、拳銃のトリガーを絞り、マズルフラッシュが闇を裂く。
ドォオオオンッ
光に遅れて、激しい銃撃音が闇の中に響き渡った。

五話目（前書き）

英数字か漢数字に統一しろって？イヤ（＊、ω、＊）うん、これ投稿して七日後削除してから直す事にする

五話目

２０５６年、二月十三日、午後六時七分。
僕は彼女と彼女の兄との三人で家路についていた。
名前は、綾川美沙。
僕の一歳下で高校一年生で、僕の好きな人だった。色白で綺麗な黒髪は肩まであって、スラッとしていて出も少し背は低くて僕を見上げるくらいで。
笑顔がとても綺麗な、僕の大好きな人だった。
明るい性格で皆に好かれていて、所属するテニス部でも優秀で顧問の先生が彼女を褒めていたのを覚えている。
非の打ちどころの無い、本当に素敵な人だった。
ずっと一緒にいたかった。
「どうしたの？夕君？」
「また何か考え事をしてたんだろ。ぼぉっとしてるからな夕は」
「――拓斗は考えなしなんだよ、僕は色々考えてるの」
彼女の隣に立っているのは、彼女の兄の、綾川拓斗。
僕の数少ない友達で、多分、僕の恋敵になるだろう人だった。
スポーツも万能で、少し勉強はできないけど、それでも頭は回るし、彼女と同じくらい明るく、皆に好かれていた。
二人とも、僕にとってあこがれの人だった。
特に拓斗は、僕にとってある種嫉妬を覚えさせるくらいに、優秀だった。
「ぬかしおる」
「……にひひっ、勉強だって僕の方が上だしね」
「――お前、俺が本気出したらちびるで」

「僕、スポーツなら君の本気見たことあるけど、勉強で本気を見たことないんだけど」
「あるぜ？」
「夏休みの宿題は僕が半分手伝ったよ？」
「――あるよ、多分」
「ネタ潰し成功」
「くぁあああ。むかつくっ、お前ホントムカツクわっ」
「にひひっ」
地団駄を踏みながら歩く拓斗に、僕は肩を震わせて少し小気味よく笑う。
多分、彼はそれほど悔しくないのだろう。彼も自分が頭がいいのはなんとなくわかっているだろうから。
だけどそんな素振りをしてくれるだけで、僕の自尊心は満たされた。
その事も、彼はわかっているだろう。
悔しいような、嬉しいような――僕は複雑な笑みを浮かべ、隣で歩く彼女を見下ろした。
クスクスと彼女は端正な顔を綻ばせ、嬉しそうに笑っていた。
「ふふふっ……お兄ちゃんも夕君も楽しそう。私も混ぜてよっ」
それだけで、胸が破裂しそうな程高鳴って。
声が出なくて――
「ふぅんだっ。勉強なんぞできなくてもな、スポーツで俺は宇宙に出るんだよっ。宇宙バスケに出るんだよっ」
「お兄ちゃんそればっかり。勉強もできないと、外国の人と喋れないよ？」
「美沙もそんな事言う、お兄ちゃん悲しい……」
「だったら夕君みたいに勉強する？」
「――肉体言語があるっ。外人なんざイエスとノーが使えれば後は体でぶつかればええ事よっ」
「だから毎日傷だらけなんだ……」

「あ、ち、違うの――――ああ、そんな目で見ないでお兄ちゃん気持ちよくなるぅうう」
「……夕君いこっ」
そう言って悶える拓斗を横目に、彼女はギュッと僕の腕に腕をからめて、惚ける僕を引っ張る。
彼女の体温が伝わり、少し荒い息遣いが聞こえる。
少しムスッとしていて、それでいて少し微笑んでいるような小さな唇が見える。
惚ける僕を横目に見上げ、少し照れくさそうに笑う彼女がいる。
その笑顔がとても可愛くて、僕は顔を耳まで真っ赤にする――
「……」
「……ねぇ夕君」
小声で華奢な身体を寄せながら、彼女は肩にコツリと頬を擦りつける。
それだけで、僕はどうしようもなく戸惑い、口がまともに動かなくなり、手足がびりびりと痺れる。
どうしようもなく、彼女の事で一杯になる。
息が上がり、寒いのに体の芯から真っ赤になっていく――――
「み、美沙ちゃん……」
「えへへへっ……恋人同士みたいだね」
「――――」
正直ここから先は、あまり自分が何を言ったのか、彼女が何を言っていたのか思い出せなかった。
ただ、彼女が微笑んでいたのを覚えていた。
それだけが、胸の奥深くまで刻まれていた。
とても綺麗な笑顔だった。
「ねぇ……夕君。明日、誰かからチョコもらう事とかある？」
「え……えと、お母さんから貰うとか……犬のチロに上げるんだけど僕は……えと」
「ふふっ。男の子なのに？」

「う、うん毎年お父さんがあげる振りしろって……うん……」
「――私から貰っても嬉しい？」
「も、もちろん……うんっ、嬉しい……嬉しいよっ」
「――ぎ、義理だからね」
「う、うんっ……」
「お兄ちゃんと一緒だし――勘違いしちゃやだよっ」
「う、うん……でも、嬉しい」
「――明日、ちゃんと作るからねっ」
嬉しそうに、彼女は微笑んだ。
夕闇の中、少し頬を染め、黄昏時の空の下、僕の腕に華奢な身体を寄せながら彼女は、僕にそう告げた。
僕はというと、全身真っ赤にして、頭から湯気が出そうなくらい息を上げていた。
正直なところ言うと、血管が切れて死にそうなくらい、心臓がバクバクいっていた。
そんな音を彼女に聞かれたくなくて、僕は胸元を僅かに抑えた。
それでも、心臓の音は止まらなかった。
「こらぁああ！そんな異性交遊お兄ちゃんは認めんぞぉおおお！」
飛び込んできて、僕らの愛大入ってくるのは拓斗。
ムスッとこちらを睨む彼の横顔の向こう、突然の兄の行動に惚ける彼女の顔が見えた。
そして、僕の方を見た。
優しく微笑んでいた。
ホッとするような少し寂しいような――僕は再び三人で夕闇の街を見下ろし、坂道を上がっていく。
いつも一緒の、長い坂道。
隣同士の家を目指し、共に歩いていく。
そして明日も、同じように、登校時間、三人で隣同士の家を出て、この坂道を降りて同じ高校へと行くだろう。
ずっと一緒に――

「おい、何話してたんだ夕？」
「――――な、なんでも……」
「……美沙ぁああ、お兄ちゃんに黙って夕と付き合う気かぁ！？」
「バカ兄貴ッ！」
鉄拳が右頬にめり込み、拓斗が吹き飛ぶ。
変わらぬ日常の風景。
ずっと続けばいいと思った。
――――だけど、それも程なく終わるだろう。
拓斗はスポーツ推薦で他の大学へと行くだろうし、美沙ちゃんは頑張っていい大学に入ることだろう。
僕はというと、親の頼みもあり、高校を出たら働くつもりだ。
今年は高校二年の二月。
もう進路を決めないといけない。
別々の道を歩いていかないといけない。
だから、伝えたかった――――
「……美沙ちゃん」
「何夕君っ？」
彼女は僕の呼び掛けに微笑んでくれた。
それだけよかった。
――明日、彼女に告白しよう。
ちゃんとしたチョコを作って――――本当は女の子が男の子に上げる日なんだけど――彼女に渡そう。
振られたっていい、このまま何もないまま終わらせたくなかった。
決別するために、或いは次につなげるために
僕、夕・アトラは明日告白する事に決めた。
明日、二月十四日。バレンタインデー。
あの日に、俺は彼女に愛を告げることを決めた。
人類の割が死滅した、あの地獄の日に、俺は彼女と共に生きようと決めた。

五話目（後書き）

一人称と三人称のコラボォオオオ

六話目（前書き）

この辺りからちょっと文章があやしくなります（下手くそ的な意味で。まぁニヤニヤ見てやってくださいな

六話目

『……ここらへんだな』

――――遠くに見えるは、スポットライトに照らされた巨大なドーム状の白い施設。

あちこちに聳え立つ煙突からは、煙ではなくうっすらと白い光の粒子が噴き上がり、警報が暗闇の中に絶え間なく響く場所。

そこから遠く、三キロ離れたビルの屋上。

四機の黒装甲の巨人、オルフェトが四つの廃ビルの屋上に立ち、足もとのコンクリートに固定用のアンカーを打ちこんでいた。

肩には、巨大な筒が二本。

両腕にはグリップとトリガーが付いたフレームが握られていて、三機のオルフェトは肩に装備した二本のバレルを外し、残りの一機は周囲を警戒する。

そして、巨大なバレルを連結し、出来上がったのは、約全長十メートル超のパワードスーツを優に超える巨大砲台。

それら三つの砲塔が、白いドーム状の施設に向けられ、バレルの底部から三本脚の脚立が迫り出す。

そして隣のビルの屋上に脚立が突き刺さり、三機のオルフェトがグリップとトリガーを抱えたままその場に膝をつく。

そして膝の装甲が展開し固定用のアンカーが迫り出す中、アイサイトの向こうに巨大な施設を捉える。

『エンジン直結』

『了解。……本隊は？』

『信じろよ。皆うまくやる。これで戦いに一歩前に進める。隊長を

信じるんだ』
『――うん』
胸元の装甲が開き、剥き出しになる連結部
アンカーが計四基地面に刺さる中、砲台のストック部分と胸元のコンポーネントが連結し、砲塔の先端に光が灯る。
『エネルギーを装填――約五秒後に一斉射を行う』
『了解。ピーター、敵は？』
『ソナーに反応なし――行こうっ』
『カウントダウン開始』
――シュゥウウウッ
装甲の隙間から光の粒子が噴き上がり、ソレと共に砲塔の先から零れる光が膨れ上がっていく。
そして今にも破裂せんばかりに、光の奔流がバレルの内側で暴れる。
『三、二、一――』
回転し始める十メートル超のバレル。
ドーム状の施設を捉えながらガタガタとバレルが上下に揺れ、排莢口から光の粒子が止まることなく噴きだす。
バレルの回転がさらに早くなり、加速に先端から光の塊が顔を出す。
グッとトリガーに指を添え、アイサイトに真っ白なドームを捉える――
『ミハイル！』
『ゴルドチーム、敵施設を攻撃する！』
――龍の如く飛び出す奔流。
夜に沈んだ街を真っ直ぐに抉る光の刃。
三つの光の柱は一つにまとまり、ビルの廃虚を一瞬で灰に融かし、三キロ先の一直線にドームを貫いた。
追随するようにソニックブームが立ち上り、土煙と共に周囲のビルを吹き飛ばしドームの装甲をめくり上げる。

そして光の奔流はその射線を太くしながら、内側まで紅く融かしていく。
『破壊を……確認っ』
『よっしゃぁあああ！』
――――ドームの装甲を破り、内側から噴きだす紅い爆炎。
光の斜線が細くなっていく中、ぽっかりと刳り貫かれた施設の前後の壁から大きな爆発が立て続きに起きた。
崩れていくドーム状の施設。
立ち上るいくつもの火柱に混じり、光の粒子が噴き上がって灰に混じって薄暗い闇の向こうへと昇っていく。
ドォオオオンッ
爆音は遅れて、四機のオルフェトの下に届き、ビルの合間に反響する。
そしてひと際大きな爆発が起きて、ドーム状の施設が内側からはじけ飛んで、小さなキノコ雲が登った。
そして崩れる建物と巨大な爆発に衝撃波が土煙を巻き上げながら、津波の如く噴き上がり、メグロの廃虚を飲み込み始める。
『退避するぞ！』
『ヤッホォオオオッ。成功成功ッ！』
コンポーネントから外れる巨大な砲塔。
立ち上がるままに固定用アンカーが収納され、三機のオルフェトは廃ビルから降り立ち土煙の津波に背中を向けた。
そしてビルの合間、本隊に向かて、ビルがいくつも倒壊して入り組んだ路地を走行していく。
大きな衝撃波の壁が迫り、次々と倒れていく廃ビルの群れ。
いくつもビルを押し倒し、砂塵を巻き上げながら、爆風が四機のオルフェトを撒きこまんと迫る。
ガガガッ
瓦礫が装甲を叩き、アイサイトに砂塵に呑まれた灰色の景色が映り始める。

『ピーター！』
『シールドエフェクト展開ッ、空間位相転移するっ』
四機のオルフェトが走行しながら集まる中、光の粒子が四機から噴き上がって砂塵に包まれた四つの機体を包む。
ガタガタと瓦礫を弾く分厚い光の膜。
やがて砂塵の津波が去っていくまで、光の膜の中で耐えながら四機は本体まで走っていく。
やがて晴れる砂塵の向こう、弱々しいマズルフラッシュが闇を裂くクレーター状の更地が見えてくる。
そしてその奥に、黒いオルフェトが集まる友軍機の姿がアイサイトに移る。
『ゴルドチーム、報告を』
通信に響くのは、ライフルの重たい発砲音と共に一人の落ち付いた男の声だった。
ガングレド・ハイエク。
獣人反乱軍の副官であり、総大将であるユウ・アトラの右腕としてのポジションを持つ優秀な獣人だった。
ホッと通信機にため息を零しながら、四人はそのガングレドに告げる。
『ゴルドチーム、作戦完遂しました……』
『ねぇねぇ見たガングレドさんっ、僕らやったよッ！』
『イエエエイッ、最高っ！』
本体に混ざる四機の黒いオルフェト。
その言葉に、通信機越しのガングレドの声に、同じくホッとしたような声色が混ざる
『よくやった――全機に通達。これから撤退行動に移る、各員弾幕を張りつつ交代、ポイントSに集まれ』
土煙の中に弾けるマズルフラッシュ。
送電施設を失い、街全体を照らすスポットライトが次々と途切れ、深い宵闇が廃虚の街に広がり始めた。

弾幕を張りながら、計四十機の黒きオルフェトが撤退を開始する。
ソレと同じくして、日本連邦軍のエルザもまた、破壊された送電施設の方向へと下がっていき、広大な更地に響く銃撃音が小さくなっていく。
『……ユウ……貴方も早く』
そして、宵闇の中、ビルの間を潜り、黒いオルフェトの群れが下がっていき、再び廃虚のメグロに静寂が広がる。
聞こえてくるのは、砂塵が風に巻かれて傾いたビルの窓を撫でる音。
そして、割れたアスファルトの下、地下から響く、断続的な発砲音とキャタピラの走行音。
そして、絡み合う二体の獣のうめき声。
地下の巨大な迷路の中、戦う二人がいた――

七話目

「……よしっ」
手作りじゃ、さすがに引かれるかなと思って買ったのは、少し高い店に寄って手に入れたチョコレート。
鞄の中に入れて、少し早めに僕は学校へと家を飛び出した。
「行ってきますっお父さん、お母さんっ」
「はぁい行ってらっしゃいっ」
「ちゃんと勉強してくるんだぞ」
父と母は笑顔で僕を見送った。
いつもと変わらない、日常の風景だった。
僕は玄関を飛び出し息を切らし、まだ太陽の昇りかけた朝の七時にあの坂道を走っていく。
ぎこちない顔は、二人に見せられなかった。
キリッとしっかりとした顔を、彼女に見せたかった。
ふと、坂道を降りて行きながら街を見下ろせば、朝焼けが海の方から昇ってきて、街を紅く染めていった。
灰色に染まっていた家の屋根は、光を浴びて様々に色を帯びる。
ゆっくりと朝焼けへと流れていく白い雲は、頬を染める。
広がる海は太陽の光に赤い絨毯を引き、空は茜色に染まっていく。
木々は海の風にざわざわと揺れ、遠くで犬の鳴き声が聞こえて、朝がやってくるのを告げる。
――――二月十四日。
朝がやってくる。
注ぎ込まれる日差しに、胸の中の期待が膨らむ。
僕は冷たい空気を吸い込み、昇る朝日を全身に浴びながら、少し

だけ顔を強張らせる。
（……彼女に告白しよう）
好きだって。
手を繋いで、一緒に同じ空を見ていたいって。
僕は昇る太陽を横目に、また坂道を下りていく。
彼女より先に、下駄箱に手紙を入れよう。
それから――――彼女に会って、それから――――
そう考えながら、顔がみるみる真っ赤になって、息ができないくらいに胸がドクドク言って苦しかった。
でも、いやな苦しさじゃなかった――――

十億人。
残った『人』はそれだけだと思った。
だけど十年もたてば状況はさらに変化――――悪化していった。
突然の人々の変異に対応するために、残った人々はどうしたかというと、未来へと時間を早めることに決めたのだ。
その為に各地に存在する緊急用シェルターに入り、冷凍睡眠に入り、状況が収まるのを待った。
もちろん、入れない人も多くいたが、それでも世界各地に存在するシェルターは約八億人を収容して、未来へと旅立った。
――――旅立つ、はずだった。
考えてみれば、できるわけがなかった。
この変異は、あらゆる人に平等にして起きるものだった。それが冷凍状態であろうと、何であろうと変わらない。
そしてシェルターも、元は核戦争用で、こんな状況を想定して作

られたものではなかった。
それ以上に、人は多すぎた。
そんな不確定要素が多く孕んだ未来への旅がどうなったかは、言うまでもなかった。
原因は様々ある。
冷凍睡眠に入った『人』の中に『異人』化を起こし、残った人間すべてが殺された。
或いはシェルターが破られ、異人、或いはシェルターに入り損ねた人間達に壊滅させられた。
或いは、そもそもシェルターが機能せず、入った人間すべてが凍死した。
およそ、八億人が入ったシェルターは、全て――――洩れなく全て、壊滅した。
残ったのは二億人の『人』と『獣人』だけだった。
ただ、その二億人の『人間』も戦いの中で、徐々にだが減る傾向にあった。
アメリカと中国と呼ばれた国はなくなっていた。たがいに降り注いだ核が命を灰に変えていったからだ。
日本人は、もう一万人を切っていた――――殆どの人が併合先のアメリカで核の灰を受けたからだ。
残ったのは、数千人の『獣人』と数千人の『人間』だけだった。
この十年。
世界は更に『人』を間引いていった。
異人化は大凡収まったものの、もう社会を再構築できる程に、世界は体力を残してはいなかった。
文明はおよそ死滅した。
残ったのは、荒廃した世界と、その中で辛うじて生きて、戦争を続ける『人間』の悪意だけだった。
『人』はこの世界に存在していなかった。
人はただ、戦い続ける。

命を削り――――例え世界が消滅しようとも、相手を殺そうと、戦い続ける。

八話目

甲板に収納されていく二十機の黒きオルフェト。
収納ハンガーエリアには壁に六メートル強のパワードスーツが固定されたまま、整備員に修理されていた。
皆、身体の一部、全部に体毛や耳など器官の生えた獣人だった。
皆、顔を見ればわかるとおり、年端もいかない子どもばかりだった。
皆、次の戦いに備えて、必死な様相で溶接器具と耐熱マスクを顔にあてがいながら、修理を続けていた。
そこは戦艦『エルドラド』
獣人反乱軍が所有する二隻の機動戦艦の一隻で、比較的小型であるものの、戦闘用設備は充実した核エンジンの艦だった。
大型巡洋ミサイルを三門装備し、実弾砲門は前方と左舷右舷にそれぞれ二門ずつ配備され、ＣＩＷＳは十基、至る所に装備されていた。またパワードスーツは計四十機程配備できた。
船全体は通常の流線形の形とは違い比較的丸みを帯びた大型艦で、通常上記装備は全て装甲の中に格納されている。
また『エルドラド』は海に潜る事も出来、格納されている装備には対艦魚雷発射砲門を前後に二門ずつあり、水圧軽減の為に広域シールドエフェクトも発動することができた。
そんな『エルドラド』は今、薄暗い東京湾の入り口から離れ海に潜ろうとしていた。
「……まったく、ユウ殿は無謀が過ぎる」

「……。そのセリフは何回も聞いた」
「何回も聞いてなぜ同じことをするのですか！？」
「――バカだからな、俺は……」
ペタンと垂れる尖った耳。
ハンガーエリア上部、吹き抜けを走る通路を歩きながら、銀の狼、ユウは首筋を摩りながら苦々しく顔を歪めた。
後ろには同じく黒い体毛の狼男、ガングレドがブツブツ呟きながら歩いてきている。
さながら家庭教師に怒られているようで、ユウは気まずそうに爪で鼻筋を掻き、ジトリと横目にガングレドを覗きこむ。
「だが……助かったろう？」
「――そのセリフ、皆に言えますか？」
「……すまんよ」
ギロリと恨めしげに蒼い瞳をこちらに向ける副官に、ユウは怖々と首をすくめるままにトボトボと通路を歩いていく。
「隊長ぉおおお！」
と、通路の向こう側から走ってくる人影が四つ。
目を見開けば、そこにはまだ年端の行かない獣人の子供達、ゴルドチームのミハイル、ピーター、エリザベス、ハルキだった。
皆十代もいかない少年少女のような瞳で、銀の狼の腰にしがみつくままに目を輝かせ彼を見上げた。
「ねぇねぇ隊長、僕らやったよっ」
「ドォオオンッってやったんだぜ、あそこ」
「えへへっ、僕らのおかげだよねっこの作戦」
「――ねぇ……僕も頑張ったよ……攻撃はしてないけど」
皆嬉しそうに我先にと話しかけていて、ユウは少し困ったような笑みを滲ませつつ、四人の頭をそっと撫でた。
「よくやった……報告はちゃんと後で聞くが……なによりお前達が生き残って、俺は嬉しい」
「隊長……」

「本当に……お前達が俺の作戦の最大の功労者だよ」
『ウンッ！』
ペタンと撫でやすそうに少し垂れた四人の耳が途端に尖り、皆通路に立ちながら嬉しそうにはしゃぎ始める。
皆、子供のようだった――
「えへへっ、嬉しいな……お父さんに褒められてるみたい」
「隊長は皆のお父さんだよ。強いんだよっ」
「うんっ、強い。絶対に連邦軍をやっつけるんだからっ」
「み、皆……隊長の邪魔だよぉ……」
「あ……じゃあ僕達行きますねっ」
「ばいばいっ隊長！僕らオルフェトの調整行かないと」
そう言って走り去っていく子供たちを、ユウは複雑な表情を浮かべ手を振る以外に何もできなかった。
ただ、手を振る自分自身に嫌悪感を覚えながら――
「……」
「ユウ殿。彼らは自分の意思で志願しました」
「――そんな状況にしたのは、或いは俺かもしれんな……」
「……戦いに死はつきものです」
「余ったパイロット枠に彼らをあてがったのも、パイロット枠に空席を作ったのも俺だ」
「……」
「現在の戦況、戦力、その他報告を聞かせてくれ。……ミアも呼んで今後の状況を考えたい」
「はいっ」
「――ガングレド」
銀の尻尾を靡かせ、ユウはクッと顎を引いて前を向いて、顔を強張らせ強く床を蹴り歩き始める。
紅い瞳を細め、息を吐き出す――
「ありがとう……一緒にいてくれて」
「……。隊長は皆の希望です」

「なら、早く終わらせないとな……」
「――――はいっ」
前を歩く大きな背中を見つめながら、黒い狼のガングレドは力強く頷いた。
やがて通路は扉をくぐりぬけ、吹き抜けを過ぎて壁が左右に広がり、その通路の隅に少し大きな扉があった。
扉の脇に設置された遺伝子リーダーに自身の手をかざしては、開く扉。
中は殺風景なものだった。
大きな机と本棚とベッドのみが設置された部屋。壁に大型のモニターが設置され、薄暗いライトが部屋を照らしていた。
総大将である、ユウ・アトラの部屋だった。
「あ、遅かったねユウッ」
「すまんな、時間が掛かった」
入り口付近のボタンを押せば、ライトが付き、部屋の隅ベッドの縁に座りながら、小さな人影が見えた。
着こんだ白衣は床につき、ほっそりとした脚をプラプラと投げ出し、佇むのは小さな少女。
肌は真っ白で獣耳はなく、長い栗色の髪に蒼い瞳を浮かべ、そこには『人間』がいた。
十代前半の子供。
ニッコリと微笑めば、年相応の表情が見え、少女は床に足を下ろすままに部屋に入るユウに歩み寄る。
そして笑みを滲ませ、メガネ越しに苦々しく顔をしかめる狼男の目を覗きこむ。
笑みが深まる――――
「……あんまり見るな」
「やだ」
「……ミア。戦況はどうだ？」
小さなため息と共に、ガングレドと共に部屋に入ると、ユウは机

の上に腰を落とし腕を組んだ。
少女は表情一つ変えず、彼のベッドの上に座り、壁にもたれるガングレドとユウを見比べつつ話し始める。
「まぁメグロの施設を破壊したことで、都庁のシールドエフェクトは５０％システムダウンしたね。
後はシブヤの方にある地下軍事施設だね」
「そうか……ミア、メグロ戦での報告を聞きたい」
「戦死者は五名。エリス、ユウキ、タイレン、ジョージ、ピエール」
すらすらとそう言って、ミアと呼ばれた少女は白衣の裏から数枚の紙の束を取り出し、彼に手渡した。
それは戦死報告書。
一人ひとり、どのような形で生き、どのような形でこの反乱軍に入り、どのような形で死んでいったかが克明に書かれていた。
皆若く、エリスは女の子で、最年少十五歳だった。
どの言葉も最後は『メグロ送電施設制圧戦にて戦死』と書かれていた。
皆、死んでしまった。
「ティッシュあるよ？」
「……最後に取っておくよ」
「仕方ないよ。メグロ戦の為に陽動小隊を五つも用意して東京の各地に送ったんだから、戦力の年齢がどうしても低くなるんだから。
パイロット自体、というより獣人自体が減っているんだから」
「――陽動部隊はどうだ？」
「皆全員帰還したよ。怪我してる連中が多いけど、今は皆医務室にいるよ」
「後で俺も行こう。……弔いにもな」
「僕も付き合うよ」
「ありがとう……」
短く言葉を切り、ユウは小さくミアに頭を下げると、視線を黒い狼のガングレドに向けた。

「……。現存兵器の状況――というよりどれだけ弾薬を使ってどれくらいオルフェトを壊した？」
「本隊で中々に摩耗しました、とはいえ、半壊機は五機の身であり、後は簡易補修を行えばすぐにでも出せます」
そう言ってガングレドは手に持っていた紙の束を同じくユウに差し出した。
そっちはさらに細かな文章がずらずらと並んでいて――ユウは苦々しい表情と共に、ベッドに座る少女に手招きをした。
キョトンとなる蒼い瞳。
スッと立ちあがるままにミアはトトトッと小走りに駆けより、彼の差しだす報告書を手に取った。
そして、恨めしげな、少し困ったような表情を彼に見せ唇を尖らせる――
「何？またぼくに読ませるの？」
「――俺バカだからな……」
「もう……オルフェトは五機半壊――――さっきの五人の分だね。残りはそれほど壊れていないよ。
使用した火器は……うん、弾薬が相当減ってるね。火器自体は超長距離圧縮重エネルギー波動砲が破壊されているね」
「後で俺が補充しておこう。重粒子砲の方はアトモス社に頼む」
「お願い――後は……ソレほど、かな？」
「何よりだ……」
トトトッ駆けてくる小さな足音。
疲労の滲む深いため息と共にユウは腕を組んで、手を差し出すとミアから受け取った報告書を机の上に置いた。
そしてガングレドとミアを見比べるままに表情を少し強張らせる。
「さて……今後の予定だが」
「隊長、そろそろシブヤの地下軍事施設を責める方が良いかと」
「……前回と合わせて、まだヨコハマの送電施設を破壊しきっていない。これで都庁に入れるか？」

「部隊を二つに分ければ或いは――――」
「――――わかった。俺が二でガングレドが八だ」
「隊長……真剣に考えています？」
「な、なんで疑う……」
ムッとする黒い狼のガングレドに、ユウは焦りに目を細めては、たどたどしく首を傾げた。
だがガングレドは深いため息と共にガクリと項垂れるとあきれた様子で首を振った。
「……。私が全部隊の七割を牽引して送電施設を破壊します」
「ん、わかった。同時期がいいな。俺は部隊三割を率いてシブヤに攻める事にしよう」
「――――こっちの守備隊はどうするのユウ？」
と、不思議そうに首をかしげていたミアに、ユウは顔を上げると、小さく肩をすぼめた。
「……十五歳以下の子供達を守備隊に回す。その上での三・七分割だ」
「結構縮小するよ、大丈夫？」
「ぞろぞろやってきて成功したのは今回だけだ。出来る限り早く終わらせ早く帰る」
「君は大丈夫だろうけど、ガングレドは平気？」
ムッと顔をしかめては黒い狼は目を細め、不思議そうに首を傾げる少女に、低い声で呻く。
「――――これでも元軍人だ。小娘に心配される謂われはない」
「傲慢は人を殺すよ」
「肝に銘じている、だからこそ、七割の部隊を隊長より任せていただくのだ」
「少なくない？」
「ごり押しはするつもりはない――――私は隊長ではないのだから」
「だよね」
困ったようにペタンと垂れる尖った耳。

クスクスと笑う少女、そしてムスッとする黒い狼男の視線に、ユウは肩身も狭そうに首をすぼめた。
「……今後の作戦はこれでいいな……詳しい事は旗艦に戻って考えよう」
「了解です」
「じゃあ解散。俺は少し医務室に足を運ぶ」
そう言って机の上から離れるユウを、ガングレドは小さく首を振って制止する。
「いえ。隊長は少しお休みください」
「疲れているように見えるか？」
「目が淀んでいます」
「……」
「いやな事があったのでしょう。少し心を鎮めて次に備えてください。大将がそれでは式に関わります」
「……子どもたちに気取られたか？」
表情が少し強張り、自身の紅い瞳を手で覆うユウの姿に、ガングレドは小さく首を振った。
「いえ……ですが、貴方の疲労は組織全体の疲労に繋がります。どうかお休みを」
「……代わりに行ってくれ」
「御意」
「すまん……」
「私はこれで失礼します」
にこにこと笑い小さく手を振る少女を横目に、ガングレドは強張った表情のまま優に頭を下げ部屋を後にする。
自動で閉まる扉。
二人きりになり、ミアは項垂れる銀の狼男の横顔を覗きこんでは、無邪気に首を傾げた。
「ユウ……聞いてあげよっか？」
「――いや、いい」

「そっ。なら後でお酒持ってくるね。ユウの好きな甘いシャンパン」
「ああ……すまない、ミア」
「ううん。後で新型機の話もしたいからね。何かあったらぼくの部屋に連絡ちょうだい」
無言のままユウは小さなため息と共に頷く。
ミアはそれでも表情一つ変えず笑顔のまま、頷いて見せると白衣を翻し踵を返して小走りに部屋を出て行こうと部屋の扉の前に立った。
「……ねぇッ」
自動で開く扉。
廊下へと足を一歩踏み出しながら、少女は白衣を翻し俯くユウへと向き合うと仄かに微笑んだ。
「二年前、君に聞いたよね」
「――――」
「今度、答えを聞かせてほしいな――――そう思っただけッ」
「……いつかな」
「うんっ」
ミアは部屋を出ていき、再び自動扉が閉まる。
零れる小さなため息。
ユウは首の後ろについたスーツのボタンに指を添えると、ベッドへと足を向けた。
身体を覆っていたスーツの上半身が縦に二つに割れ、覗かせるのは全身を覆い尽くす銀色の体毛。
薄いパイロットスーツを脱ぎ捨てるままに、ユウはベッドに身体を横たえては天井を見上げた。
「……タクト」
――――瞼に映るのは、怒り狂った老け顔の青年の顔。
躊躇なくトリガーを撃つ仕草。
年齢以上に時間を重ね、心の苦しみに悶えながら、銃を向けるかつての友人の顔が眼に映った。

彼の言葉が、耳に残った――――
――――殺してやる……！
彼の憎悪が、胸にこびり付いた。
――――美沙は……美沙は死んだんだぞ！
自身の悔恨が、ただ胸の奥でぐるぐると渦巻いた。
――――お前が殺したんだぁああ！
「……ああ」
のっぺりとした薄暗い天井を見上げ一人そう呟くと、ユウは体を横たえベッドの上に背中を丸めた。
少しでも長く眠ろう――――彼は、強く目を閉じ、意識を闇の奥へ向ける。
それでも、闇の中に、彼はユウの前に立っていた。
ユウを睨み、銃を向けていた――――
（……美沙……僕は……）
銃弾が飛んでくる。
頭に弾痕が浮かび、闇の深みへと身体と意識が吸い込まれていく。
どこまでも落ちていく――――

九話目

――――正しい事をしていると、到底思えるはずもなかった。
ただ、こうすることで、少しでも俺達が未来に近づけると思ってがむしゃらになっていただけだった。
平和な、誰も争う事の無い未来へと。
夢物語だ。
そんなもの、追いかけるだけ無駄なのに、俺は、追いかけた。
そんな俺の為に、今回で五人、前回で十人の仲間を失った。
皆、俺の為に死んだ。
俺は、彼らの為に何かしてやれたろうか。
俺は――――何のために戦っているのだろうか。
美沙……。
なんで……死んでしまったんだ。
僕は――――

夢を見た。
「隊長！ここですっ！」
ヨコハマ電力送電施設内。
沿岸に出来たメグロと同じく巨大なドーム状の施設で、山に囲まれたそこは正に自然の要塞だった。
当時は、メグロと違い強力な空間位相転移による防壁が張られて

いて、正直圧縮エネルギーによる重粒子砲でも貫くことはできなかった。
だからどうすればいいかと考えた時、俺は数人の仲間と共に潜入することにした。
それは、おそらく正しいのだろう。
だけど、警備網は多く、中心部に爆弾を設置するために、多くの対人兵器、ロボットと戦い、俺達は疲弊した。
辿りつ頃には、仲間の装備はボロボロになっていた。
「……皆、大丈夫か？」
「ああっ、まだまだいけるさっ」
「少し弾薬が心もとないけど……なんとかなります」
「弾薬が少ない奴はこっちに来い。俺が補充する」
――クセリアス・アナトリウス。
十年前、俺がこの姿になって、使えるようになった『魔法』の一つで、これを使えば持ってる弾薬が自然に回復した。
ただ、これを使っても壊れた武器や装備を直せるものではなかった。
何より、仲間の心的な疲労は目に見えていた。
ここから地獄の復路をめぐるには、恐らく誰かが脱落することは容易に想像できた。
「……よし。爆弾を設置するぞ」
――その可能性を、俺は無視した。
「これでいい。……ガングレド、ガングレド！」
通信機に叫べど通信は届かない。
恐らく電磁障壁が張ってあり、これでは遠隔操作により爆発は起こせないだろう。
俺は仲間を見比べる。
――皆、少し困ったような笑みを浮かべていた。
「……やりますか、隊長」
制限時間を設けようにも、長ければ、敵に見つかり、短ければ仲

間はおそらく巻き込まれるだろう。
かといってエルクシュ・アルト・ラナフェル――防壁魔法を展開して、爆発に耐えられる自信もなかった。
そして、こうして考えている間にも敵の気配は徐々に近づいてきているのが、耳と鼻を伝って感じた。
ざわざわと全身の体毛が逆立つ程に、俺は恐怖した。
もしかしたら、仲間を失うかもしれない事に――――
「……五分だ」
「了解です」
「行きましょうッ」
別途時限式の小型爆弾をポシェットから取り出し、俺は設置した爆弾に連動させると仲間と共にその場を後にした。
後は事務的だった。
送電施設最奥部に三か所、タイマー式爆弾を設置し、時間を動かし、俺達はその場を後にした。
――そして、直ぐさま敵の姿が目の前に現れた。
「どけぇえええええ！」
切り込み隊長はいつも俺だった。
そして敵は、無数の触手と大きな羽を背中から生やした、八つ脚の二つの首、七つの目を持つ人影だった。
『異人』だった。
連邦政府の人員はこちらと同じく相当減っているらしく、警備兵に捕らえた『異人』を使い警護させていた。
どこもそうだった――――殆どのエルザ搭乗者が『人』ではなかった。
それほどまでに、『人類』は疲弊していた
「――――鈍い！」
サイレンけたたましい通路の壁ごと切り裂くナイフの斬痕が『異人』の身体に浮かぶ。
刹那、飛び散る血飛沫。

顔に降りかかり、真っ赤に染まっていくスーツと銀の体毛。
やがて真っ二つに敵が崩れるままに、ナイフを投げ飛ばしては、ナイフは光る粒子の尾を引いて飛び出した。
――アクスファラ・アトラシア。
強化したナイフは飛翔しながら空間ごと刳り貫くように、掠めるだけで敵の腕や頭部を一瞬で血煙に変えた。
そして通路奥に突き刺さるナイフ。
紅い血飛沫が辺りにまきちらされ、警告灯に紅く染まる通路に黒く壁に滲んでいく。
かつての『人』がまた一人、死んでいく――
「……。行くぞ！」
――迷いは許されなかった。
時間はなく俺は後ろに続く仲間を引き連れ、狭い通路を走り、事前に作成した脱出ルートそのままに走った。
マズルフラッシュに続いて弾丸が背後から掠め、敵を抉っていく。
背中を押されているような気がして、俺はナイフを口に咥え、身体を屈めながら拳銃を二丁敵に突き出す。
薬莢が宙に舞い、身体を屈めて走る俺の肩を叩いて地面に転がる。
敵を殺していけば、それだけ仲間が助かる。
だけどソレは『人』の数をさらに減らす事だった。
俺は、これでいいのか、俺は――
「あ、隊長！」
「……ああ」
考えを払い、ルート通りに進みながら。通路の向こうに、スポットライトの光が零れる夜の宵闇が見えてくる。
出口が近い。
時間も近い。
予断は許されず、俺は仲間を引き連れ、地面を蹴りあげヨコハマのドーム状の送電施設から飛び出した。
そしてうっすらと施設の周りを覆う光の膜を見上げる――

「……」
――軽く絶望した。
そこには出口の周りを塞ぐように、白い装甲のエルザが、辺りを囲んでいたのだ。
手には巨大なライフルを担ぎ、虚ろな蒼いアイサイトがじっとこちらを見下ろすままに、トリガーに手を添えている。
「……た、隊長」
――宙を舞う、巨大な空薬莢。
「エルクシュ――――アルト・ラナフェル……！」
虚空に手を掲げるままに、光の円形の模様が手の平から広がり、大きな半透明の盾が目の前で弾丸を弾き飛ばす。
それでも止まぬ断続的なマズルフラッシュと、大量の硝煙。
立て続きに飛んでくる弾丸の雨に、身体が後ろに持っていかれ、背後に送電施設がそびえる。
掲げた光の盾の向こうには、廃虚の街が広がり、その中に逆るマズルフラッシュ、未だにガングレドの陽動部隊が戦っていた。
こちらには来れないだろう。
そして、制限時間は時を刻み続けている。
――――時間がない。
焦りが身体を無理やりに動かす。
彼らを助けたい。
後ずさる仲間の前に立ちながら、俺は体を前のめりに屈めつつ再び歩き出す事にした。
光の盾の向こう、巨大な弾丸に身体を押し込まれながら、それでも爪を食い込ませ、地面を蹴りあげる。
仲間の下に帰る。
彼らを生きて帰す――――
『ユウぅうううううう！』
――――聞こえてくるのは、懐かしい声だった。
怒りが滲みしゃがれた、潰れたようなソレでもわかる。

およそ、十年ぶりの声だった。
あの日、生き別れた友達の声だった。
あの地獄の日に、姿を消した――いや、彼の下から俺が逃げて、隠れていたはずなのに。
彼は追ってきた。
白いエルザに乗って、俺の前に立っていた。
大型の対物狙撃銃を担ぎ、肩にガンランチャーとミサイルポットを装備して、青ざめる俺に向け、立っていた。
「……タクト……」
『殺してやるぅうううう！』
――気が緩んでしまった。
ミサイルの爆発と大口径のガンランチャーのマズルフラッシュは、掲げた光の盾を一瞬で剥がしかけた。
それ以上に、重たい衝撃に身体が軋み、膝をついてしまう。
ぎりぎりと手の平を掲げた右腕の骨が悲鳴を上げる。
光の粒が飛び散り、薄っぺらい光の膜の向こうに、爆風が噴き上がり、弾丸が爆炎の中で突き刺さる。
ダメだ。
このままでは俺の力でも防ぎきれない。
仲間が殺される――
「お前ら！一旦建物に隠れろ！」
引くに引けない状況の中、俺は巨大な爆弾の中に隠れと、無茶な指示を後ろの同胞の出した。
囲われている状況で、それでもこの弾幕から身体を隠れさせるには十分だ。
彼らを助けないと。
彼らを――
「隊長を助けろ！皆撃てぇえええ！」
――振り返れば、そこにはライフルを掲げ、トリガーを引く仲間がいた。

皆、真剣な表情で弾幕の向こうにいる、パワードスーツに銃撃を始め、或いは手榴弾を投げつけていた。
こちらの弾丸は光の膜を通り抜け、敵にあたり、小さな爆発に一機のエルザの足が破壊されその場に崩れ落ちる。
それでも敵の弾幕は止まず、仲間は崩れ落ちる俺の肩を支え、銃を撃つ。
弾幕を作り、道を作ろうとする――
「隊長！隊長だけでも逃げてください！」
「――ダメだ……ダメだ！」
「……僕らは死ぬんじゃありません。次につなげるために、皆が幸せになるために戦うんです！」
「隊長、言ってくれましたよね。俺らを幸せにしたいって、皆で平和な場所に行くんだって」
「……こんな姿になった僕らにほほ笑んでくれたのは、隊長です」
「一緒に生きようと言ってくれたのは隊長です」
「俺らを気遣い、こんな世界に居場所をくれたのは隊長です」
「僕らは――隊長の信じる未来を信じます……」
――皆、微笑んでいた。
「……隊長一人なら、ここから逃げられます」
「――生きて、皆を未来に導いてください」
「ユウ隊長ならそれができる――行ってください」
光の壁にひびが入る。
もう耐えられない。
逃げてくれ、逃げてくれ――どうして、俺なんかのために、俺の為に笑ってくれるんだ。
俺は――
「隊長、生きて――――」
光の壁が破られ、吹き飛ばされる俺の身体。
仲間は、流れ込んでくる爆炎の中に消えた。
霞む視界の中、皆、最後まで笑っていた――

『ユウゥウウウウッ』
拓斗の地獄から噴き上がるような声が、爆炎の中にいつまでも響き、直ぐさま弾丸が俺の方へと飛んできた。
俺は、地面に節々を打ち付け痛む身体を引きずり、走った。
仲間を見捨て、ここから逃げようとした。
程なくして、送電施設から大きな爆発が起きた。
施設の周囲を覆うバリアフィールドが消失し、爆風と共に俺の身体は空高く吹き飛ばされた。
最後まで、タクトのうめき声が聞こえていた。
仲間の言葉が、頭の中にグルグルと渦巻いていた。
――この日、第一次襲撃作戦は、失敗した。
結果から言うなら、ヨコハマ送電施設は、未だ最低限の機能を残したままだった。
送電機能を切り、都庁を制圧しなければ、この作戦は成功しないのに、俺は第一手からして失敗した。
最低だ。
最低な大将だった。
仲間を見捨て、作戦は失敗し、何もできずに、俺は気がつけば、送電施設の周辺都市の廃虚に身体を投げ出していた。
およそ七百メートル、夜空高く飛ばされ、そして地面に体をぶつけたようだ。
それでも、身体の節々が痛んでいるだけで済んだ。
俺だけが、生きていた。
「……ハヤト……アニス……ミーシャ……オードリー……」
宵闇をかき消すように、赤々と炎が送電施設から立ち上り、深い夜天を真っ赤に染め上げていく。
黒い灰が空へと昇り、海風に消えていく。
俺は――
――生きてください、隊長。
頭の中に、彼らの声が聞こえた。

彼らは記憶の中で、ただ優しく微笑んでいた。
俺は、ただこえなく涙を流し、昇る炎の明りに目を細め、立ちつくしていることしかできなかった。
――その日、俺の仲間が十人死んだ。
皆、大切な仲間だった。
こんなくそったれな世界に生まれた、誰一人手放す事の出来ない仲間だった。

十話目

「……起きた？」
――――気がつけば、涙があふれていた。
目を開けば、そこには薄暗い天井と少し広い部屋が、滲んでぼやけた視界に映った。
ベッドのそばに誰かいる。
霞んだ眼を擦れば、そこにはメガネを掛けた栗色の髪の少女が微笑んでいた。
手には大きなボトルが一つ。
そしてグラスが二つ。
「一緒に呑もう？」
表情を崩さず、少女、ミアは静かにそう告げると、ベッドの縁に座りながらユウに囁いた。
ヒクリと尖る耳。
ムクリと巨躯を動かし起き上がれば、微かに関節が軋みを上げ、特に肩に痛みが走りユウは顔をしかめ肩を押さえる。
自身の身体を見下ろせば、まだ着替えていないようで銀色の体毛を帯びた上半身とスーツを着た下半身が見えた。
床に投げ捨てたはずのスーツの半身はすでになく、ユウは寝ぼけた目で隣に座るミアを見下ろす。
「……すまない」
「えへへっ。泣いてる」
「……ああ」
涙が伝った痕が、体毛の濡れた痕となって突き出た鼻筋の根元を

伝い、銀の狼は静かに目尻を拭った。
スクッと立ちあがる華奢な体。
両腕にシャンパンのセットを持ちながら机の上に、ミアは楽しそうにシャンパンのコルクに手を添える。
ポンッ……
何もせずとも、自然と零れるコルク。
泡が口の端から零れ、少女はグラスに白いシャンパンを注ぐとユウに差し出した。
「はい」
「……何か、用があったのか？」
「ううん」
優しく首を振る少女。
ユウは小さなため息と共にグラスを受け取ると、僅かに開いた口腔へと白い液体を流し込んだ。
裂けた口の間から僅かにシャンパンが溢れ、銀の体毛が濡れた。
「……甘い」
「おいしいでしょ」
「……今どこだ？」
「もう少しで旗艦『アストライア』だよ」
シャンパンを注ぐ音、泡の爆ぜる小気味いい音が部屋に響く。
自身のグラスに白く澄んだ液体を注ぎ、ミアはこちらに振り返ると、再びベッドの縁に腰を下ろした。
そして紅い瞳をメガネの奥に覗かせながら、ユウの真紅の瞳を見つめる。
眠たそうに細めた狼の目に、優しく微笑む———
「———少し眠れた？」
「ああ……」
「いやな夢だった？」
「……。ああ……」
「よかった」

それだけ囁くとソッと少女はユウの大きな毛むくじゃらの手に自身の手を重ねてコツリと肩に頬を寄せた。
そして足をパタパタと前後に動かし、天井を見上げる。
そんな嬉しそうな少女の横顔を、ユウはグラス片手にぼんやりと見下ろす。
「どうしたんだ？今日はとても近いな」
「ううん――ただ、昨日の君は、とても寂しそうだったから」
「……」
「夜明けが近いね」
「――昨日、友達に会った」
「よかったね」
「ああ……敵だったが、それでも元気そうだった……」
「うん」
「あいつは何人も仲間を傷つけた。何人も仲間を殺してきた」
「うん」
「……だけど、それでも生きている事が心のどこかで嬉しく感じていた。同時にひどく憎く感じていた」
「うん……」
「俺は、どうしたらいいんだろうな」
「――前に聞いたよね。君はなぜ戦うのかって」
少女は優しく微笑みながら、そう尋ねた。
ユウはハッとなって紅い瞳を見開き、ぐりぐりと顔を擦りつける少女のあどけない笑顔に表情を曇らせた
「なぜなの？」
「……。わからない」
「うん」
「未だに――はっきりとわからない。相手を殺したいのか、戦いを終わらせたいのか……」
「うん。またいつか答えてくれたらいいよ」
「すまない……」

「ううん。君の自由にしたらいい。ぼくは君に従うよ」
変わらず少女は微笑んでいた。
「あ、そうだ。新型機なんだけどね、もう少しで出来上がるってアトモスから連絡があったんだ。
二週間後には『アストライア』に搬送できるんじゃないのかな？」
「俺の、か？」
「君の専用機だよ。魔法を使う異端の『獣人』の君のみが操れるゴーレム、生きた機械――――君と同じ命を持つもの、魂の器」
「……ソウルオーブ、だったか？」
「覚えてるよね、多分ユウも」
「……あのビルの地下にあるでかい石か」
「そして、この世界を作った元凶」
「……」
「動力として組み込んでる物としては、今のオルフェトの五倍ぐらいかな？それでも君の考える作戦には支障はまったくないけどね」
「よかった……」
「都庁襲撃作戦には間に合うんじゃないかな？納期を一カ月も送らせてるのが正直あたまにくるけど」
ムスッと口を尖らせながらチビチビと口にシャンパンを付ける少女に、ユウは困ったようにうっすらと笑みを滲ませた。
そして宥めるように、彼女の栗色の髪を撫で、笑い声を含ませる。
「ふふっ、迷惑を掛ける……」
「ほぉんとっ。ぼくらにも計画ってものもあるんだからさっさと仕事してほしいよねノロマ会社は。
それでいて武器はまた別段階で作ってる段階って絶対バカにしてるんだけど。
君の要望通り、内蔵兵器中心でよかったよ。これで丸腰同然の納品とかそれこそアトモス社襲撃せざるを得なかったよぉ」
「ああ……」
「はぁ……都庁襲撃――君の要望通りに進めるよ？」

「ああ。『アストライア』もソレ用に調整を進めておいてくれ」
「うん。君はぼくが絶対に殺させないよ。もちろんみんなも、ぼくが設計した兵器が皆を助けるよ」
「――ありがとう、ミア」
ユウはそう言って少女の手を強く握りしめた。
紅い瞳を細め、強く彼女の鉄目を食い込ませる。
少女はハッとなって目を見開くと、慌てて顔を伏せては、ちびちび飲んでいたシャンパンのグラスを唇で食んだ。
「……あんまりそういう目で見ないでほしいな」
「……？」
「いいよ。君はそういう人間なんだから……」
「――す、すまんな……」
「いぃだッ。慰めに来て損したっ」
そう言って、シャンパンのグラスをユウに押し付けると、ミアは白衣をバタバタとさせて部屋の入口へ飛び出した。
ユウは戸惑いながら、彼女の背中に手を伸ばそうとする
「お、おい……」
「――もう……ペース狂うなぁ……」
「……？」
「帰るっ。『アストライア』に戻ったら次の作戦考えるよ！」
「お、おう……」
少女はそそくさと部屋を後にして出ていく。
そして閉まる前に、扉の前に立っていた人影にギョッと立ち止まり、ミアは更に速度を上げて通路を歩いて行った。
人影はムスッとした表情もそのままに、首をかしげつつ部屋へと入る。
「……ミアは何かあったのでしょうか？」
「俺を慰めに来てくれた、と……」
黒い狼のガングレドは、表情は変えず合点がいったように目を見開いては、小さく頷いて見せた。

「いいコンビですな……」
「――まぁ……これでも十年来の付き合いだからな」
「腐れ縁は、私よりも上ですかな」
「……そうだな」
「恋人、とはまだ呼べないようですがな」
――胸を走る僅かな痛み。
「……。茶化すなよ」
零れる熱っぽいため息。
ユウは俯くままに、グッと胸元の体毛を掻きむしると、表情を強張らせるままに立ちあがりガングレドに向き合った。
「何かあったか？」
「オルフェト及び各種兵器の改修状況を知らせにきました。後医務室に行きましたが隊長に来てくれとアリシアにごねられました」
やれやれとあきれた表情を滲ませるガングレドに、ユウはキョトンと目を見開いては、程なくして可笑しそうに肩を震わせた。
「あははっ……わかった。すぐに行くよ」
「後、戦死したメンバーの葬儀についてですが」
「『アストライア』についたら執り行う。それまでここで準備だけはしておこう」
「はい」
「……。皆で見送ってやらないとな」
「申し訳ありません、細々とした報告のみで」
深く頭を下げるガングレド。
ユウは小さく首を振ると、壁の隅に埋め込まれたクローゼットに手を伸ばし、服の袖に腕を通した。
「いいさ。お前の声が聞けただけでも、俺は嬉しい」
「隊長……」
「――ヨコハマ戦……まだ早いが、お前に仲間の命を預けるぞ」
「全力で戦い、全員で帰る――貴方が告げた言葉のままに」
「ああ……」

ズボンに銀の尻尾を通し、ユウは踵を返すと、ガングレドと共に自身の部屋から通路へと一歩を踏み出した。
通路は明るく、ゴンッと水が装甲を叩く音が静かに響く。
まだ水の中なのだろう――――ユウは尖った耳を震わせ、海流のさざめ気に目を閉じながら心地よさそうに口の端を歪めた。
――――もう少ししたら『家』に帰れる。
そんな機体を僅かに胸に膨らませ、ユウは医務室へと通路を歩いた。

「あ、ユウ隊長ッ。みんなみんなっ隊長着てくれたよっ」
「こら声を小さくしろ。寝ている奴もいる」
「……えへへっ。嬉しい、来てくれたんですね」
「お前がごねるからな」
――――美沙の事……忘れたのかよ……！
忘れたわけじゃなかった。
あの日の事を、忘れられるわけがなかった。今でも、夢の中にお前達が現れて、胸を強く締め付ける。
「お、隊長じゃないですか。なんですか？俺ら中年の裸体でも見に来ました？」
「目が腐るからそれだけはやめろ」
「結構傷つきますねそれ……」
「お前らが女だったらなぁ……」
「あははっ、奥手のくせして何をおっしゃるのやら」
「！？」
「聞いてますよ、またミアちゃん夜這いに言ったのに、何一つ手を

つけなかったんでしょ」
「……ただ腐れ縁だよ」
「にひひひっ。やっぱ俺らの裸体が狙いなんでしょ知ってますよ」
「やめて……」
ただ、それでも今を生きないといけない。
俺は『獣人』で、タクト、お前は『人間』だ。戦うなと言われたら、おそらく無理な関係だろう。
人と獣人の溝はそれほどまで深まった。
それ以上に、人類は減りすぎた。
「ちょっとぉ、隊長は私のお婿さんになる予定ですからねッ！」
「あ、無理無理。ユウ君は今絶賛予約枠いっぱいでアリシアちゃんみたいな小さい胸じゃどう考えても」
「ていうかあんまり釣り合うようにも――」
「うっさい筋肉ダルマども！今度口利いたらぶち殺すぞ！」
「……すんましぇん……」
「敵より怖いっす……」
――俺は別に『獣人』の未来を救いたいわけじゃない。
ただ、俺の周りにいる、仲間を平和な未来へと一緒に歩いていきたい、そう考えているだけだ。
美沙は、そんな俺を許すのだろうか。
俺は――
「隊長、泣いてます？」
「――お前らが生きてくれて、嬉しいんだよ」
「……。えへへっ、今度も生き残りますよ」
「ああ……俺が死なせない」
「私も、絶対に隊長を、皆を死なせやしませんからっ」
「あ、俺も」
「俺もだ、隊長にずっと付いていくぜっ」
「ありがとう皆――すまんな、しんみりさせてしまって」
「おしっ。じゃあ俺がなんかやりますよ。隊長見ててくださいねっ」

「ああッ」
静かな医務室が騒がしくなっていき、やがて医療班の人間に怒られるまでの少しの間俺達は笑い声を交わし続けた。
これは最期じゃない。
未来を繋げるために、明日も笑っていられるように、ずっと。
生きていこう。
その為に――――戦おう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4601ba/

黄昏のオオカミ―The Twilight of Xenoatla―

2012年1月13日01時48分発行